

## 八、左官屋

八月の何日かにわたる大雨は胡同の入り口の外の三間間口の家屋を崩潰させ、そして焼餅屋の丁稚を一人圧死させた。我が家も同時にいくつかの泥壁が崩れ、家屋はほとんどの部屋も雨漏りがした。すっかり晴れ上がるのを待って、左官屋を呼んで修理してもらうしかなかった。

最初の日、彼らは庭の南の垣を修理したが、わたしは彼らがやってきたかと思うと帰ってしまい、仕事の時間よりも休んでる方が多く思えた。夕方になってもまだいくらも垣が築けてないので、面白くなく、彼らに小言を言った。

二日目、なんの事もなし。わたしはふだんパイレートを飲むので、いくつか空き瓶が残っていた。妻がそれを、一人に一つずつ酒なり醤油なり入れなさいと彼らにやった。彼らは皆喜んで、夕方帰る時など、にこにこしながら門口で瓶を高く挙げて口に傾けたり、酒を飲む様子をしたということだ。

三日目、午後三時ごろ下男がきて、左官が一人、病気になって、腹を下したので、帰らせ、そして一瓶安氏のコレラ薬液をやったと言った。

四日目、大雨が降って、左官屋は来なかった。しかし近所の話では昨日の左官は死んだ、もともと本当のコレラであったということである。わたしは彼がどの左官か知らない。ただ頭に短い辮髪をつけた、六十余のひょろ長い老人だという。

五日目、彼らはまた仕事に来た。ただ一人少なくなっていた。しかしみんなは何とも思わない。午後妻がわたしに言った。その人が亡くなってから、家には葬式の金もなく、カミさんが出向いて人から募金を集め、一円あまりを工面して、ようやく無理やり事を運んだということであった。残念ながらわたしたちは何も助けてやれなかった。

そこで左官の事件は表面上は一件落着ということになった。

※初出：1922年9月7日『晨报副刊』